スピーカ・ケーブル短縮の効果

マルチサラウンド化でほぼ実演と同様な満足感

磯崎　真

30年來イオノフェン社のイオン・トゥイータを使用してきました．その高音は自然で，とくにソプラノの子音などがきれいに出ます．しかしオーケストラの強奏などでは，ゴトウユニットSG-570 BLおよびSG-370 DXBLを中心とするオール・ホーン・システムの最高音域用としてはパワー不足が否めません．そこで，ゴトウユニットSG-160 BLトゥイータを入手し，バランスのとれた力強いオール・ホーン・システムとなりました．しかし繊細な歌声などの透明感ではなおイオン・トゥイータに一歩ゆずる点があって，ソースに応じて使い分けてきました．(*1)

この最高音の違いは何に由来するかと思案の結果，発音方式の違いはもちろんですが，専用真空管アンプからユニットまでのケーブル長が効いているのではないか，と思案するようになりました．各音域ユニット用の真空管パワー・アンプ群をリスニング・ルーム裏手のアンプ室に置いているため，トゥイータ・ユニット専用6 RA 8-PPアンプからのSPケーブルが左用は約5 m，右用は約3 mと長くなっていました．ケーブルの分布容量は，左で実測1200 pFほどです．

中・低域用はともかく，トゥイータでは違いが出るかもしれません．P社ブランドの4芯，比較的安価なSPケーブルでした．mあたりン万円の高級ケーブルならよいのかもしれませんが，その確証もなく，それだけの投資をしてみる元気はありません．それに各SPケーブルは室内美観上，低音ホーンの上部にできるダクト内を通してアンプ室まで敷設してあるので，ちょっと替えてみるのはたいへんです．

そこで，遊んでいた別の6 RA 8-PPステレオ・アンプの部品も活用し，SG-160 BL専用の真空管モノ・アンプ2台を作って，左右各ユニットの直近へ配置してみることにしました．チャネル・デバイダからのライン信号ケーブルは，秋葉原のオヤイデで切売りしている比較的よさそうな2芯シールド線を買ってきて，新たに敷設しました．

また，アンプ出力とSG-160 BLの間は50 cm以下で，あり合わせの撚りあわせベルデンSPケーブルを使いました．

その結果は予想以上で，やや金属的な響きのあった音源でも抵抗なく力強い響きとなり，完成後約半年聴いていますが，SG-160 BLの魅力は増すばかりです．イオン・トゥイータとの切り替えも最近はほとんどなくなりました．

●専用モノ・アンプを作る

なにぶんSG-160 BLは高能率なので，アンプのパワーは重要ではありません．それよりわずかのノイズ

●磯崎さんのオール・ホーン型メインSPシステム

フロント1chのほか，AVC-A1SRの7ch擬似サラウンド用として，後部と同じP社ブックシェルフ型SPをさらに2個リスニング・ルーム左右前寄りに配置しています．

フロントのセンターSPは，暫定的に手持ちのAR社小型2ウェイ1台を使っています．センターSPは，レベル合わせしても結構なレベルの音楽/音声が再生されることが多いようです．フロント2chが40Hzまで充分出る低音ショート・ホーンなので，サブ・ウーファは使っていません．

DVD-A1とAVC-A1SRの間はDENON Linkなる専用デジタル・インタフェースでマルチチャネル接続でき，Second Editionへのバージョンアップも受けて96kHzサンプル24bit，マルチチャネルデジタルのままAVアンプへ送れます．DVD-VideoやLDの音楽やオペラ，またテレビのBS-hiやBS2，CSクラシカなどのデジタル音声を，個別にオーディオ・ディレイなる機能によって最大200msまで遅延できます．

テレビ・モニタ画面はプログレッシブ化の処理時間などで遅れるので，画と音を一致させることができます．これは指揮者とオーケストラの間(マ)とか，ヴァイオリンの運弓と音，歌の口パクのずれなどを補正できて，たいへん重宝しています．

生の演奏会でも目を閉じて聴くかたもおられますが，私はオペラに限らず演奏者の顔や動きも音楽的感興を倍増します．

DVD-Audioは静止画なのでオーディオ・ディレイは必要ないが，ほんとうはDVD-AudioやSACDの音質でハイビジョン並みの動く画面も見たいものです．ブルーレーザーDVDで高音質+高画質動画の標準化が望まれますが，またもや競合2方式ですかネ？

●放送と録音の質を上げてほしい

上記のトゥイータ専用アンプとサラウンド・マルチ化によって，50年来追い求めてきたオーディオ再生装置のレベルはほぼ満足できるレベルに達したかと思っています．音場が正確に再現されているかどうかは実証もできないし，自分としては家で実演と同等な感動を得られれば充分，という心境です．あとは，演奏や画面収録の質とともに，録音あるいは放送のオーディオ・フォーマットが問題です．

NHK　BS-hiやBS-2では最近N響定期演奏会や海外オケ，オペラなどを深夜に結構いろいろやってくれるので，保存はともかくタイム・シフト録画が必要です．CSスカパーのクラシカを含めてi-Linkでデジタル予約録画しても見切れないくらいです．

しかし，NHKのデジタルBS-hiやBS-2の音楽放送のBモードAAC圧縮音声は，大規模なオーケストラ曲などでは不満が残ります．同じBS-2でもアナログBS-2の48K/16bitリニアPCMの方が，私の印象でははるかに楽しめる音がします．そこで一時市場に出たデジタル音声/アナログ映像記録のS-VHS　DAフォーマット，JVCのHR-Z1 VTRのジャンク品を入手し，メーカーでのヘッド交換・整備を経て夜中のN響などのBS-2を記録し，直接受信と変わらぬ音で楽しんでいます．

アナログBS-2のBモード・ステレオ48K/16bitなら，N響定期などのオケでも，AVC-A1SRの擬似7chサラウンドを通せばほぼ満足できる音場が得られます．生の演奏会へ行っても，家とは音が違うという落差をとくに感じなくなりました．配席が悪いと，家で気兼ねなく聴く方がよいくらいです．

しかし，ブルックナーの交響曲の実演は違います．N響/サントリーホール/クリヴィヌだったか(？)で聴いたブルックナー：#7，ウィーン・フィル/ムーティ/ザルツブルクの#6，ルツェルン音楽祭のバレンボイム/シカゴ響の#4など，いずれもよかった，と忘れられません．オーディオ的にも，ブルックナーの実演は大音響の奔流でスカッとする感動があります．N響5月定期サラステのブルックナー：#5は切符を買いながら風邪でムダにし残念でしたが，アナログBS-2のDA録画ではその片鱗が窺えました．

音楽的専門知識がなく，ブルックナーの交響曲がなぜ再生しにくいのかよくわかりませんが，大規模オケの中で弦・木管・金管などが同時に強奏することが多いためでしょうか？

画はなくても，DVD-AudioやSACDでこのような大曲・名演奏の96Kマルチ録音があればよいだろうと思いますが，残念ながらこの種の本格ソフトは見当たりません．

ちなみにTELDECやERATOのオケもの，JVCの「鬼太鼓座」など96K/24bit　PCMマルチのDVD-Audio盤は10枚以上買いましたが，いずれもCDやBS放送とは一味も二味も違います．(*2)

しかしクラシック畑のよいソフトが続きません．SACDでこの種の本格マルチ録音が多発されるような

ら，専用プレーヤを調達しなければなりません．

また放送では数年後アナログBS-2のDA音声が聴けなくなるのは(自分の年齢は棚に上げても)悲しいことです．最近の大容量HDDレコーダでも，アナログBS-2の16 bitリニアPCMを記録できるものは，不勉強かもしれませんが，見当たりません．ハイビジョン等のAAC圧縮ビット・レートをもっと上げるなど，改善を期待したいところです．リファレンスとしてはブルックナーの交響曲がまともに通るものであって欲しいところです．

ブルーレーザーDVDなどの画・音のフォーマットも，DVD-Audioの96 K/24 bit/5.1マルチやSACDマルチの音声フォーマットを劣化させることのないよう希望したいものです．

なお，CSスカパーのクラシカジャパンの音声は48 K/16 bit PCM(?)らしく，DENONのAL 24 Processingが働き，たいへんよい音の番組もあります．

*1：磯崎「私のリスニング・ルーム」ラ技 2002-5月号 pp 105-109

*2：磯崎「DVDオーディオ・ソフトはBS-2以上」ラ技 2002-7月号 pp. 168-169

ふたたびデジタル・アンプについて

大出力にふさわしい大型SPシステムが必要

兼坂寿良

5月号でデジタル・アンプについていろいろ書きましたが，もうすこし書いてみたいと思います．

オーディオ界というのはえてして保守的で，デジタル・アンプに対しても偏見があると思う．なかなか正統に評価はされていない．見た目も弁当箱ぐらいの大きさしかなくて，とてもハイエンド・オーディオで使用されているようなフルサイズのビッグ・アンプには及びもつきません．

しかし見た目はともかく，たいへんな技術のかたまりです.『ラジオ技術』とか『MJ』の読者ならわかるでしょう．アンプを作る技術が一気に飛躍した感じです．海外のハイエンドのアンプを作っているメーカーも，気になることでしょう．

ソニー，ヤマハ，シャープは自前で半導体を作ることができるので，実現できたと思います(中略)．

パイオニアがこの前300万円(1台)もするスピーカ・システムを発表しましたが，あまりにも高価なためか，いまだに見たことも聴いたこともありません．いったいどこにおいてあるのでしょうか？ TADのスピーカ・システムまではだいたいどこの店でもありました．このスピーカ・システムはまかふしぎでKEFにそっくりなのです．TADはJBLの10 cmドライバ375と38 cmウーファLE 15の流れをくむものでした．

とにかく10 cmドライバはほとんどのスピーカ・メーカーは手を出しません．製作にあまりにもぼう大なお金がかかりすぎるからです．ソニーにもすぐれた10 cmドライバがありましたが，いまはもう売られていないようです．

このスピーカ・システムがあれば重低音20 Hzから超高音60 kHzぐらいはカバーできるし，大出力，大音量にも耐えられます(木下モニターというすぐれたものもありますが，あ